

ツシマウラボシシジミ保全活動 ～島で起こる生態系破壊を止めるには～

川島 優大

1. はじめに

私たちは9月16日から19日まで対馬へ滞在した。当レポートでは対馬市文化交流・自然共生課主任の神宮周作氏が行っているツシマウラボシシジミの保全活動に関する内容を、上県町佐須奈地区で行ったツシマウラボシシジミの食草の植樹活動及び神宮氏へのインタビューを基に考察する。

2. ツシマウラボシシジミの保全活動について

①ツシマウラボシシジミとは

ツシマウラボシシジミとは現在、絶滅危惧 IA 類（環境省第4次レッドリスト）に分類される体長2cm程度の蝶であり、対馬の上島のみで生息している。神宮氏によると、保全活動を始めた2013年当初は成虫が5匹しか生息を確認できない状況であったという。ただ、1900年に巖原町内山地区で採取された当種の標本が見つかるため、過去には島全体に多く生息していた可能性もあるが、生息数は2010年ごろから急速に減り始め、その最大の要因はツシマジカの食害による下草の消失とされている。

②保全活動の内容について

我々はアクションリサーチ2日目の9月17日に佐須奈地区のツシマウラボシシジミ保護区にて保全活動を行った。内容としては、当種の食草であるケヤブハギとヌスビトハギの植栽を神宮氏の指導の下、計11人で2時間程度行うものである。今回は、長崎県立対馬高等学校ユネスコスクール部の生徒が育てた2種類の苗を植生保護区内の空いている場所に植えた。

③保全活動について

我々が作業を行った保護区は高さ2m程度の防護柵で覆われ、その中だけは緑が茂っており、防護柵の外と比較すると、シカの食害の被害を抑止できていると実感できる風景であった。また、防護柵の中には対馬の固有種でもあるツシマジボウシなども自生しており、保全活動の効果が見てとれた。また、植栽の合間に保護区内でツシマウラボシシジミの生体や卵、幼虫や蛹も探索し、成体と蛹を観察することができた。保護区内には、当個体を発見した翌年から年間100～200匹ほどの蛹を放しており、その8割程度が羽化に成功し成体になっている推測とのことであった。

また、当保護区は現在佐須奈地区に9ヵ所設置されている。延べ面積は12,750㎡程度であり、国内最大級の蝶の保護区である。これらは1ヵ所に固めるのではなく、少し間隔をあけて設置されている。理由としては当種の行動範囲が広いこと、過去のデータからも分布域が変化する種である可能性があることが挙げられる。これは我々がゼミナールで行っている「蝶の道プロジェクト」にも、蝶の行動範囲を考えて食草を植え、生物多様性を維持するという点から、通ずるものがあると感じた。保護区の環境としては、沢沿いの平らな地形を好むのでそのような場所を選んで保護区を設置しており、間伐をしたちょうどいい薄暗さで湿気がある程度保たれている必要があるという。また、このような環境は蝶が好むものではあるが、それはつまり食草となる植物がちょうど生える環境でもあるとのことであった。整備に関しては上県町の地域おこしボランティアグループである「もやいの会 佐須奈」の方々が市役所と協力をして行っている部分が多い。予算に関しては現在、年間400～500万円が市の予算からツシマウラボシジミ保全事業費として割り当てられており、市のツシマヤマネコ関連予算が200万円程度であることと比較しても多いことが分かる。この予算はふるさと納税の充当金があてられることが多いという。ただこの予算も初年度から割り当てられていたわけではなく、割り当てられるまでの3～4年間は予算がない中で神宮氏自身が植樹をする植物の種を植え増やし、周知を含めたきっかけ作りをしていたという。また、土地代は市の予算では付きにくいいため、地元の方にお問い合わせで使用させていただいている状況であり、市役所と地元の方の仲介には「もやいの会 佐須奈」の方々が入っている。「もやいの会 佐須奈」の方々の影響はとても大きく、市役所の方々が言うのとは違い、佐須奈の住民に言われることによる、地元人としての「初めて見つかったところだから絶やしてはいけない」という意識を奮い立たせる効果があるという。

3. 保全活動のヒアリングを通して感じたこと

私は保護区に関してはまだ試行錯誤をしながら行っているところも多いように感じた。防護柵の張り方を例に挙げると、最初は1m×2mの柵を縦にして高さ2mを確保していたものの、たまたま横にして利用して柵の高さは1mとしてその上に簡易的にロープを張ったところ、専門家には柵の上を越えられてしまい防護柵としての意味をなさないとされたものの、実際はこれまでのところシカの食害に遭っていないという。このように今後も少しずつ試行錯誤を重ねて労力とコストをカットしていくと思われる。ただ、現状として資材運びや設置に関しても予算より労力が必要な状況とのことで、地域の高齢化による保護活動維持の難しさも見えてきた。

実際に植栽を体験してみて、まだスタートしてから数年しか経っていない保全活動としてはとても大きな結果が出ているように感じたので、今後より一層活性化してほしい。ツシマウラボシジミの保全活動はまだ期間が短いこともあり効果が出ているのかを判断

することが難しい状況ではあるが、下草の生え方を見ると十分に効果が期待できるものだと感じた。また、見学をしている中で植栽を行った保護区とは別の、まだ蛹を放してはいない保護区でもツシマウラボシシジミを観察することができ、短期間でも効果が出ているという印象を受けた。このような現状を周知する活動をすることによって、今一番必要な労力の確保にも繋がるとともに、対馬高等学校のユネスコスクール部から少しでも多くの高校生などの若い層に輪を広げて、未来につながるような持続的な活動になってほしいと思う。

ツシマウラボシシジミは現在限定的な保護区でのみ生息が可能な状況にあり、完全に定着したといえる状況にするにはまだまだ障害が多くある。また、ツシマジカの個体数増加に関しても人間が関わっているところが大きくあったように、ツシマウラボシシジミのみを保護すればよいというわけでもないことは明確であると考え。そのため、今後はいかに元あった自然に近いような形で保全をしていくことができるかどうかが鍵になってくると思う。

4. 考察

私は当保全活動の問題点として対馬の住民の人であっても、ツシマウラボシシジミに対する認知が低い現状があり、その点に関してはもっと周知が必要だと考える。今回のアクションリサーチと一緒にワークショップを行った対馬高等学校のユネスコスクール部の生徒たちであっても、当活動に参加するまでは全く関心がなかったと話しており、また、他の生徒たちが必ずしも興味を持っているわけではないといていたのは少し寂しく感じた。しかしながら、ユネスコスクール部の生徒たちは各々でしっかりとした意見を持っているように見受けられ、一人一人が自分たち以上に今後を見据えて普段から活動をしているように感じられた。そのような点では「蝶の道プロジェクト」と関連付けながら、対馬外での周知及び個体数増加に向けて多方面からプロジェクトを企画していくことも方法の一つだと私は考える。東京と対馬という遠距離にあり、頻繁に直接交流をすることは困難であるが、SNS を利用した情報交換や、東京で育てた苗を対馬で植栽してもらうなどは行うことが可能である。ツシマウラボシシジミの個体数増加に関しては足立区生物園も保全活動を支援しているため、協力をしながら持続的に関われば良いと思う。

(かわしま・ゆうた 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ)